

木製容器における脚の変化：中世絵画資料に描かれた行器の脚を中心として

石村，真一
九州芸術工科大学工業設計学科

<https://doi.org/10.15017/4060941>

出版情報：芸術工学研究. 2, pp.1-10, 2000-06-30. 九州芸術工科大学
バージョン：
権利関係：



木製容器における脚の変化

—中世絵画資料に描かれた行器の脚を中心として—

Change of the Number of Cylindrical Wooden Container Legs:

Mainly on the Legs of "Hokai" or Cylindrical Wooden Containers Painted in the Medieval Pictures

石村真一

ISHIMURA Shinnichi

The purpose of the main discourse is to clarify the time when a four-legged "hokai" was made, investigating the material of the container called "hokai" which had been used since the Heian Period.

Almost all Japanese cylindrical wooden containers which were used popularly after early modern ages had four legs. On the contrary, Chinese cylindrical containers mainly had three legs since the ancient times. This means that four-legged Japanese containers had its own development.

As a result of the comparison between the cylindrical wooden containers drawn in the pictures of the medieval and early modern ages and the model pictures by means of three dimension software, the following has become clear.

Most of the "hokai" were influenced by "karahitsu" and "hokai" probably came into existence in the middle of the Heian Period.

None of the pictures painted between the medieval ages and the early modern ages show us four-legged "hokai", except of one in the late Kamakura Period, which had the possibility of having four legs.

It was not until in the middle of the 17th century, the time when Edo Bakuhau Taisei, Shogunate〔Baku from Bakufu〕 and domain〔han〕 system, was established that "hokai" began to have four legs. It was because "hokai" itself became formalistic.

1. はじめに

木製容器は材料が自然素材であることから、最も日常に密着した容器として発達していくが、やがて金属器や陶磁器と同様に、社会的な地位を示す意匠が加味されるようになる。脚はその主たる要素として木製容器の品格を長く支えてきた。

我々の生活で直に地面や床に食物を置くことはまずない。特別な容器がない場合においても、藁のような植物繊維の上に置いて対応したりする。少し身分の高い社会では、近世以前より紙の上に食物を置いて食する習慣があった〔注1〕。底が床に密着した折敷のような扁平な器も中世には広く発達するが、中国の青銅器に見られるように、高台や脚が付加された容器も一部は祭祀的な目的から離れ、支配者層の生活容器として定着していく。

木製容器に脚が付けられた代表的なものは、正倉院に遺された唐櫃を挙げることができる。直方体の容器は当然4本の脚を基本とするが、やがて円筒形の曲物容器にも櫃に類似した脚が付加されることになる。こうした形態を持つ容器の代表が行器（ほかい）である。

行器は、身分の高い人が外出や旅行の際に携帯する円筒形の食物容器である。曲物製で、杓の両端に天秤状につり下げて運搬することから、中世の絵画資料に数多く描かれている。伝世する行器は、大半が4本脚となっている。これまでの先行研究では、行器の脚が当初より4本であったという主張もあるが、その検証が明確に示されているとは言い難い〔注2〕。

本論の目的は、中世絵画資料に見られる行器の脚が、3本として表現されているのか、または4本として表現されているのかを明らかにすることにある。研究の方法

は、絵画資料を描写表現の技法から読み取ることと、3Dソフトにて絵画資料に描かれた行器と類似する画像を作成し、脚の構造と位置を推定するという二つの手法を併用して考察するというものである。

2. 円筒形容器における脚の起源

中国の円筒形容器に付加された脚は、図1〔注3〕に示した鼎を一つの原型として発達したと推定される。青銅という素材には、鋳型の製造に粘土を必ず使用することから、粘土を焼いた陶製の鼎が最も古い形式と規定することも可能である。但し、鼎の脚が持つ意味は、図2〔注4〕に示した容器の脚とはやや機能が異なる。鼎の脚は、食物を煮炊きする際に必要なスペースを形成する機能を備えているため、五徳に類似した機能も併せ持っているのである。

図2の容器に付加された脚は確かに鼎と同じ3本であるが、図1の発展形態とダイレクトに断定することはやや危険である。鼎の脚が本来の煮炊をする目的から離れ、一種の様式化が進展した時点で強い影響を及ぼしたか、鼎とはまったく異なる調度品の脚として出現したという二つの推論が成り立つ。図2の脚が成立した時期は出土事例を通して見た場合、少なくとも漢代以前に遡る。つまり、中国における青銅製または陶製円筒容器の脚は、漢代以前に確立した様式であり、当然身分の高さを示すステータスシンボルとして位置づけられたと推定されるのである。

青銅製、陶製容器の脚に比較して、木製容器は完全な形での出土事例が少ないことから、脚そのものの起源を遡ることが極めて難しい。図1、2のようなやや祭祀性をともなう容器は発掘品として多数出土するが、同類の木製容器の出土例は極めて希である。図3〔注5〕は図2と類似した戦国期の遺構から出土した漆器の酒樽である。下部に獣足形状の脚が3本付けられている。図2の陶製容器は青銅製容器を原型とするが、図3もそうした青銅製容器の形態を写した可能性は高い。木製容器そのものは銅器以前に誕生している。しかしながら、脚を付加した酒樽の形態は青銅器文化として定着することから、円筒形木製容器の脚は青銅器文化と連動して発達した一面を持っていたということになる。

3. 伝世された円筒形木製容器の脚

3.1 唐櫃と脚

伝世された日本の木製容器の中で、脚を付加した最も

古いものに図4に示した正倉院の唐櫃がある。正倉院には図4のような脚が付けられた唐櫃に加え、脚の無い倭櫃も遺されている。図4の唐櫃に見られる脚は、直線的な形状で構成されている。唐櫃の脚は図4から図5に示した曲面のある形態へと移行する。図5は櫃全体に蒔絵を施していることから、平安中期～後期にかけて制作されたと推定される。櫃（チェスト）類は東西に共通した木製容器であり、脚を付加した構造も数多く見られるが、図5の唐櫃が名前が示すように、先行する中国大陆の櫃を模したものと安易に判断すべきではない。正倉院文書には「辛櫃」「韓櫃」と表記しており〔注6〕、唐櫃と



図1 漢代の青銅製鼎

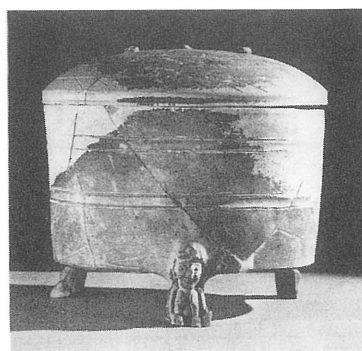


図2 漢代の陶製酒樽



図3 戦国時代の木製酒樽

いう表記を当初から使用していない。中国大陸で発達した櫃が朝鮮半島を経由して我が国に定着したと仮定しても、図5の脚のように直線的な形状で伝えられたに違いない。また、中国の伝世品に、図5と同様の脚が認められないことから〔注7〕、図4から図5という脚の変化に関しては、我が国独自の展開を示した可能性を持っている。平安期以降の唐櫃は、曲面のある反った脚が付けられた櫃とこれまで解釈されてきた。反った脚の形状を唐脚と規定しているのであるが、唐脚のお手本が中国に存在するという報告は管見の限り一切見当たらないのである。

図4と図5の脚は形態だけでなく、構造面にも相異点が認められる。図4の脚には貫を2本使用して櫃の重量を支えている。しかしながら、図5には脚に貫はなく、櫃の重量は櫃の側板と脚の固定だけで支えている。櫃全体の軽量化によって図5のような脚の構造が可能となったのであろう。

図4と図5の成立年代には、少なくとも200年以上の時間差がある。平安期の唐櫃は図5以外にも一例認められ、共に重要文化材に指定されているが、平安初期に



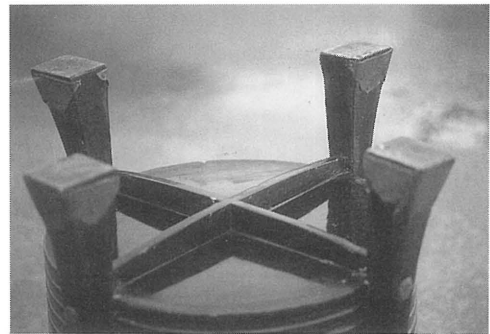
図4 赤漆密陀絵雲兔形櫃（正倉院蔵）



図5 平安時代の唐櫃（金剛峯寺蔵）



ア

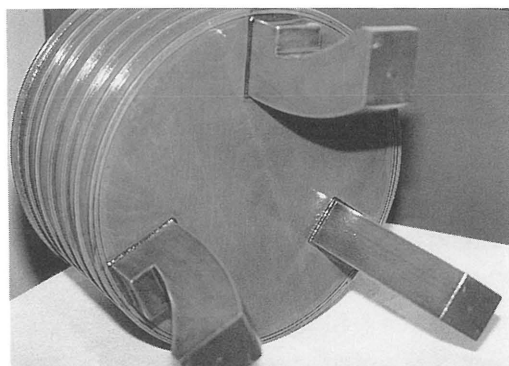


イ

図6 4本脚の曲物製行器（郡山女子大学蔵）



ア



イ

図7 3本脚の曲物製行器（福島県立博物館蔵）

製作された遺品は存在しない。このことから、反りのある脚を持つ図5のような唐櫃は、平安初期から中期にかけて成立したとするのが妥当であろう。仮に平安初期以降に図4から図5へと展開したとするならば、国風文化の進行と櫃の脚は逆行したことになる。脚を曲面加工することは確かに唐風をイメージさせるが、このイメージに手本があったのではなく、日本人のイメージとして唐風を展開させたと解すべきではなかろうか。唐風のイメージと蒔絵という組み合わせが、国風化する平安中期の造形精神の具現化と読み取るべきであろう。

3.2 行器と脚

行器（ほかい）は元々は「外居」という文字を使用していたようである。12世紀末に成立した『保元物語』では「脚高外居」という表現が既に認められることから、脚を付加した行器は、平安後期において広く使用されていたことが窺われる。旅行や外出時の食物容器として行器が発達したため、外居という文字に野外で使用するという意味を持たせていたのかもしれない。

伝世される明治期以前の行器は、図6と図7の2種類に大別される。行器の伝世品は大半が図6の形態である。

図6には4本の脚が本体に固定され、相欠き接ぎを施した十字状の貫構造で補強を施している。この脚の形態は、唐櫃の脚と極めて類似性が高い。おそらく、使用者の身分が高いことから、格式を演出するために唐櫃の脚を参考にして曲物容器に脚を付加させたのであろう。脚の形態自体は、『保元物語』が著された12世紀以前に成立していると思われるが、4本脚の行器は中世の伝世品が遺されていないため、伝世品からその成立起源を中世に遡ることは出来得ない。

埼玉県川越市の喜多院には、徳川家光が使用したとされる行器が伝えられている。その脚は図6と同じ4本脚の構造を持つことから、図6の構造が17世紀中葉には既に成立していたと推定される。

図7は福島県南会津郡田島町の祇園祭で使用される行器のレプリカである。現在は祭礼に使用されるだけで、生活品としての役目は持っていない。図7は3本脚を採用しており、脚は図6のように本体の側面に固定するのではなく、底に固定されている。こうした3本脚の固定は16世紀初頭に製作された図8〔注8〕の盥と強い類似性が感じられる。図7は図6に対して本体のプロポーションがやや扁平である。扁平であるからこそ底に脚を固定するという構造が可能となったのである。つまり、図7の脚は図4、5のような櫃類に固定された構造とは出

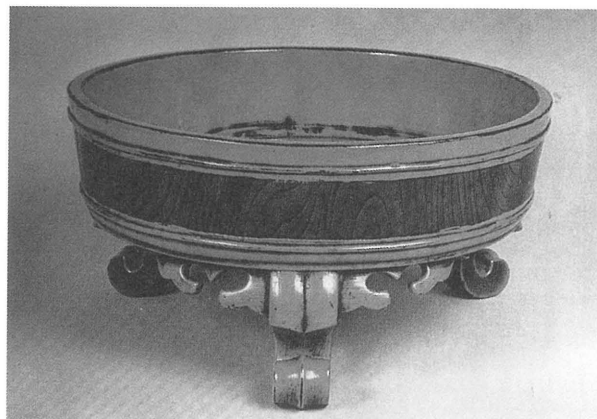


図8 根来脚付盥（個人蔵）

発点がやや異なるといえよう。図7と同様のタイプは日本民家園〔注9〕の蒐集品の中にも一例認められることから、広域に使用されていた可能性も持っている。

図6、7に示した行器の脚は、3本と4本という本数の相違だけでなく、構造そのものが異なることから、二つの系統が近世に存在したということになる。

4. 絵画資料に描かれた円筒形木製容器と脚

4.1 中世における曲物製行器と脚

中世の絵画資料の中でも、13世紀末から14世紀前半までの資料に曲物製の行器、または行器の形態に類似した水桶が数多く描かれている。その代表的な事例に『北野天神縁起弘安本』『一遍上人絵伝』『遊行上人縁起』『春日権現験記絵』『法然上人絵伝』『慕帰絵詞』等が挙げられる。12世紀から14世紀前半の絵画表現は、中国における宋画の表現を巧みに取り入れ、優れた写実表現を展開しており、画像解析に適した素材といえよう。

図9～14は鎌倉後期から南北朝期に描かれた曲物製行器である。また、図15～17は行器に似た曲物製水桶、図18は結物の水桶である。

まず食物容器として使用された行器とその脚を検討していきたい。図9～14は構造的には類似しているが、図10だけ容器がやや扁平に描かれている。図9、10、11、14は、いずれも旅行または近隣へ移動する際に必要な食物を運搬する機能を持つ。図12、13は出先で主人の用事が済むのを待っている使用人を描写しているのであろう。

図9～14に描かれた行器はすべて曲物製である。側面にテーパーがなく、完全な円筒形を示していることがその根拠となる。仮に結桶製であるならば、本体に必ずテーパーを付けて表現するはずである。図12、13の本体部



図9 曲物製行器（一遍上人絵伝）



図13 曲物製行器（法然上人絵伝）

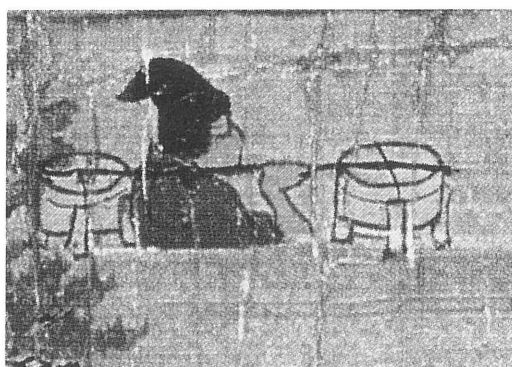


図10 曲物製行器（一遍上人絵伝）



図14 曲物製行器（慕帰絵詞）



図11 曲物製行器（春日権現験記絵）

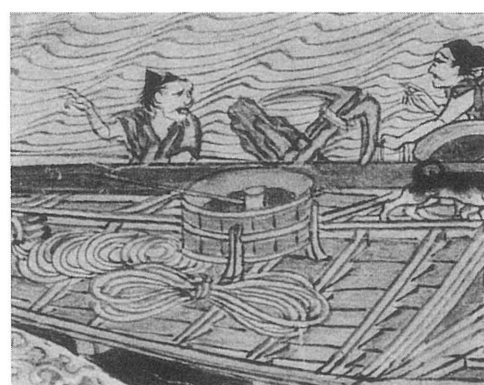


図15 曲物製水桶（松崎天神縁起）

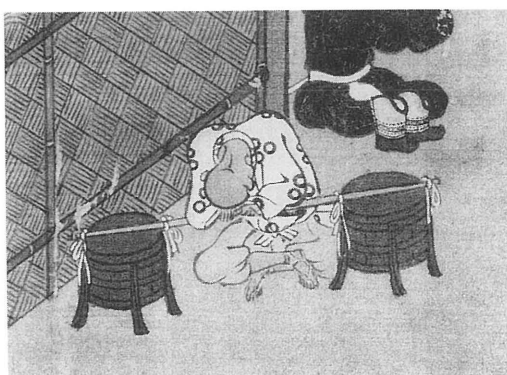


図12 曲物製行器（春日権現験記絵）



図16 曲物製水桶（春日権現験記絵）



図17 曲物製水桶（遊行上人縁起）



図18 結物製水桶（聖徳太子絵伝）

分に見られる縦方向の線は、薄いへぎ板を縦方向に補強としたものであって〔注10〕、結桶に見られる側板の継ぎ目を示しているのではない。

次に脚の本数について検討していく。絵画資料における表現方法は絵師によって多少異なることから、3Dソフトによって作成した図19-1、2の円筒容器模式図をサンプルとして考察する〔注11〕。図19-1は浅いタイプ、図19-2は深いタイプの容器に想定した。またA-3-①～A-3-⑩、B-3-①～B-3-⑩は3本脚とし、他はすべて4本脚として想定した。

図9、14と図10～13では脚の構図が異なる。図9の脚は正面に2本が描かれ、容器の背後に1本描かれている。このことから、図9の行器に付けられた脚は3本として表現したことが理解出来る。但し、図9に描かれた右側の行器は、A-3-⑪あたりの構図と推定されるが、この視点では容器の後方に位置する脚は一切見えない。絵

師が意図的に描いたという根拠はないが、3本脚という表現意識が見えないものをわざわざ見えるように設定させたのであろう。図14に描かれた左の容器は図9の構図とは異なるが、3本の脚の中で、右の1本は容器の背後に位置している。この構図では3本脚の想定は難しく、B-4-⑫に近い4本脚の設定ということになる。

図10～13に示した行器の構図は、脚の1本を正面中央に配したものである。仮に脚を3本と想定すれば、容器がやや扁平な図10は、A-3-⑩という構図となり、他の2本の脚は殆ど見えないはずである。構図から見る限り、A-4-⑦でなければ整合性が得られない。図11～13は図10に対してやや容器が深く感じられる。図13は3本の脚が明確に示されていないことから除外し、図11、12についてのみ検討する。図11、12は共に『春日権現験記絵』の画中にあることから、同じ絵師の描写である。構図も概ね等しく、脚の位置から想定すると、B-4-⑪とB-4-⑫の中間に相当する。このことから、構図上からは3本脚という可能性はない。

4.2 中世における円筒形水桶と脚

図15～18は行器と形態が類似するが、水を入れるための容器であり、食物を運搬する機能とは異なる。図15の『松崎天神縁起』は、13世紀後半に制作された『北野天神縁起弘安本』の同一場面を写したものである。画中の水桶も同様の構図で描かれている。図15を3本脚と想定すると、A-3-⑩に該当する。4本脚に想定するとA-4-⑨が最も近いが、左端に脚が少し見えなくてはならないことから、4本脚の可能性は極めて低い。

図16は図15とは逆に、左端に脚が少し見えることから、A-4-⑨に近い構図となり、4本脚の可能性が高い。

図17はこれまでの容器に対し、かなり大型に描かれている。横には組籠を掛けた同容量の結桶が置かれ、容器の大型化を象徴的に示しているように感じさせる。図17の曲物水桶は、先の図12、13、15と同じように、縦方向に薄いへぎ板を補強している。おそらく大型の水桶に必要な強度を考慮したためであろう。この容器の大きな特徴は、脚に貫が備え付けられていることにある。管見の限り中世絵画資料には類例が見当たらない。図6-イに示した構造に類似した貫が付加されている可能性が高く、構図はA-4-⑧とA-4-⑫の中間と想定される。この視点からは図17のように貫が少し見える。このことから、図17は脚と脚に付けられた貫という二つの要素により、4本脚の可能性が極めて高い。

図18はこれまで見てきた曲物容器ではなく、結物製容

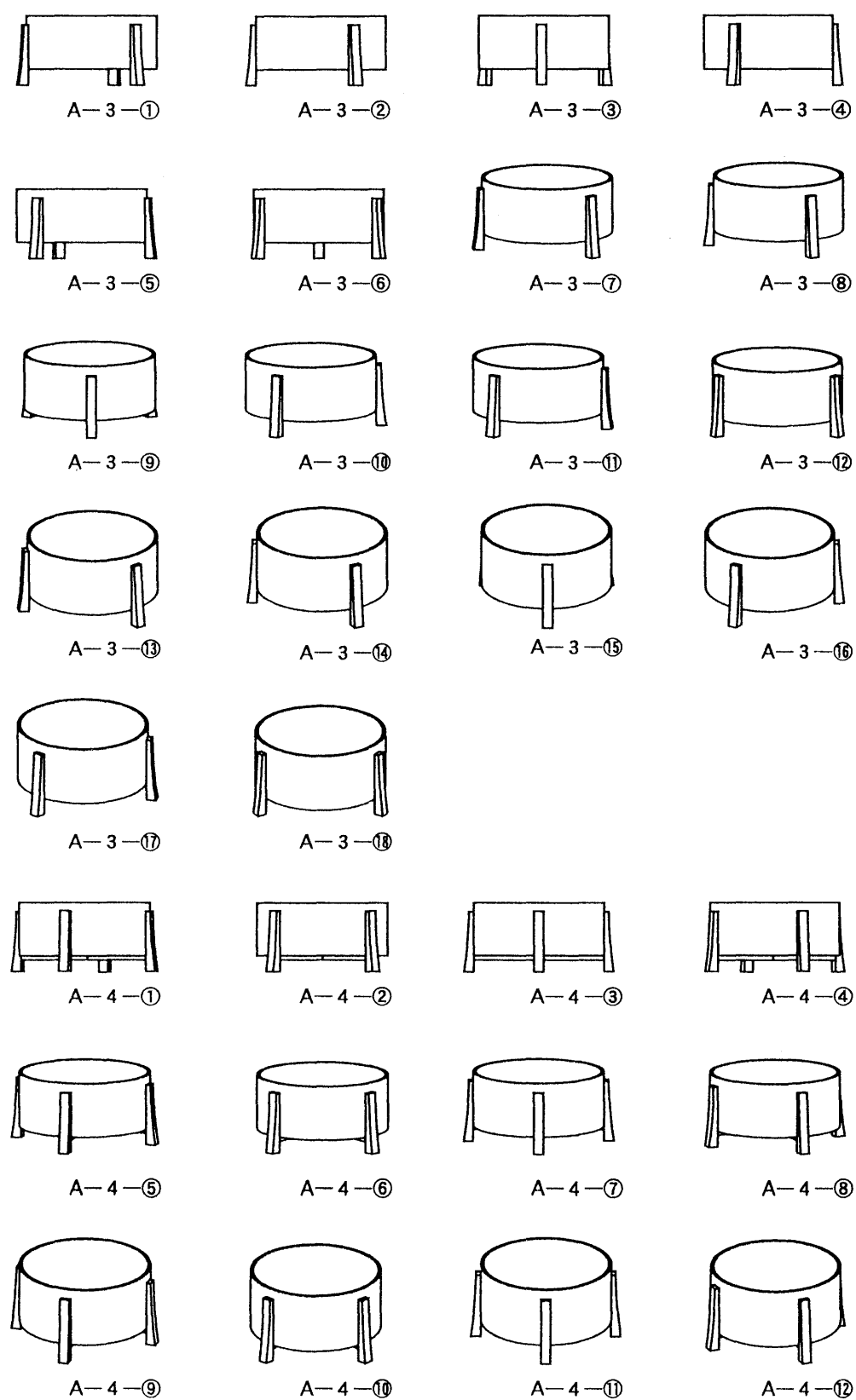


図19-1 脚付円筒形木製容器の模式図

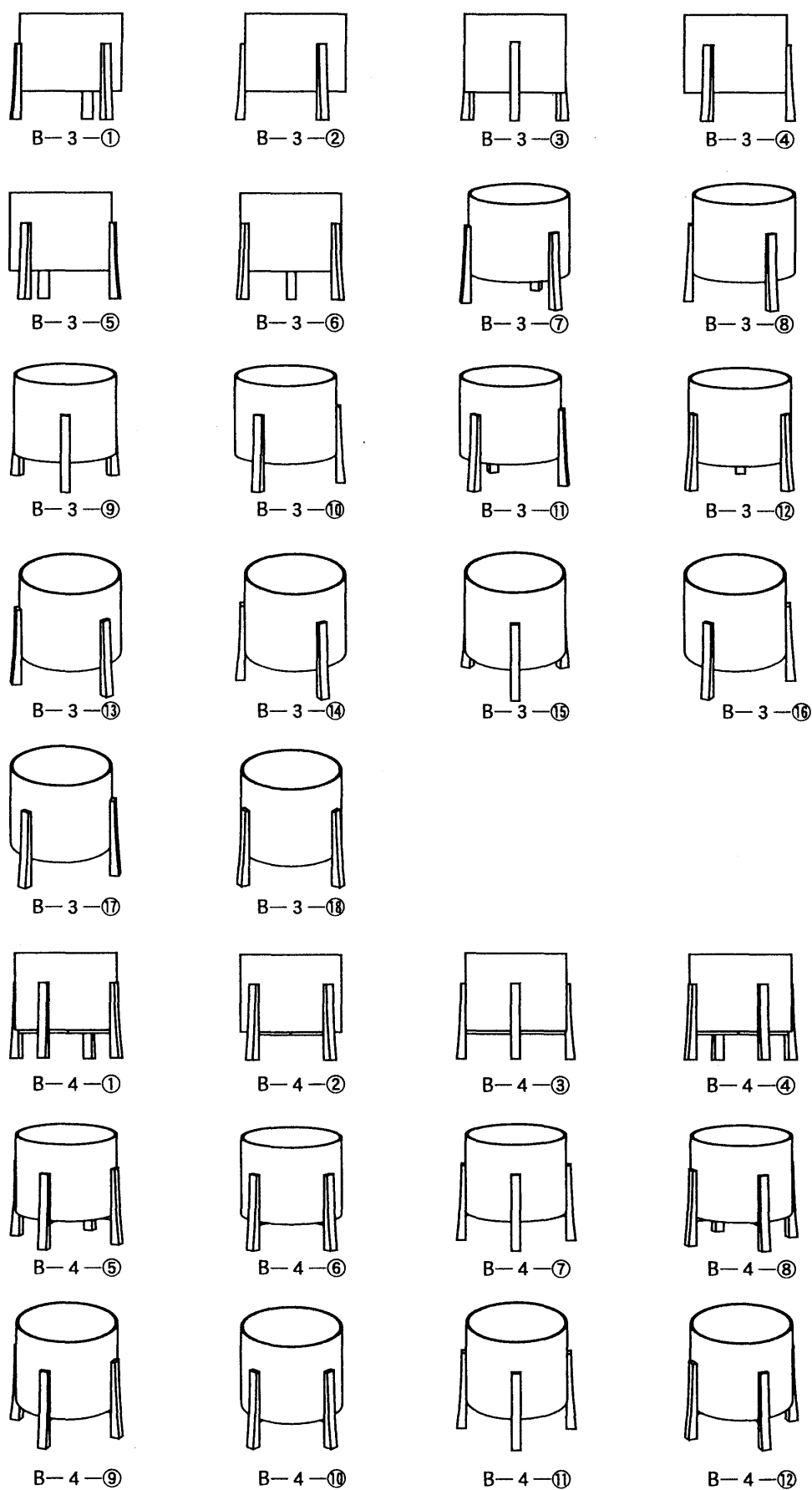


図19-2 脚付円筒形木製容器の模式図

器である。容器の内側に板の継ぎ目を表現していることから、結桶と判断出来る。やや下に広がったテーパーを示しているが、こうした形態はヨーロッパに多いものの、我が国では極めて希である。図18の脚を構図から読みとると、A-4-⑩にやや近い。しかしながら、仮に4本脚に想定しても2本の脚は距離が近すぎる。脚に関しては実態を観察せず、絵師の形態観だけで描写した可能性が高い。

4.3 近世における曲物製行器と脚

近世初期から中期にかけて描かれた絵画資料として、図20、21を事例として挙げる。

図20は17世紀初頭に描かれたものである。13世紀末から14世紀前半に描かれた図9～14は、杓の両端に直接行器を紐で固定して運搬している。16世紀に入り、杓の両端から紐で運搬物をつるすという方法が一般化していく[注12]。図20の運搬法は、そうした天秤吊りの延長上に位置しているということになる。図20は容器の本体が



図20 曲物製行器（洛中洛外図舟木本）

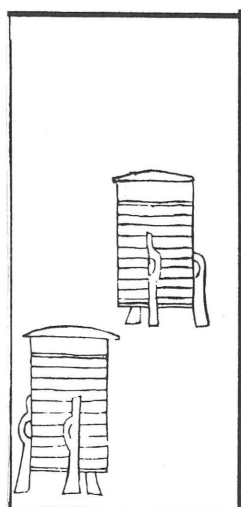


図21 曲物製行器（和漢三才図会）

やや長くなり、伝世品の図6に近いプロポーシオンになっている。また、本体周囲に横方向へ多数の細い補強が成されている点も図6と類似しており、行器そのものが近世の特徴を具備していることが窺われる。脚に関しては、B-3-⑩に近い構図で描いたと想定される。仮に4本脚であると、B-4-⑤になり、脚が4本必ず描かれていなければならない。よって図20の脚が3本であることは間違いない。

図21は1712（正徳2）年に刊行された『和漢三才図会』に掲載された行器の絵である。図6の蓋と共通する形態、横方向の補強も認められるが、プロポーシオンが極端に細長い。脚の構図は3Dソフトによる模式図では該当する事例が見当たらない。視点とほぼ平行に描かれているため、3本脚と断定出来る。描写表現の精度もあろうが、どうも均一に3本の脚が配置されていないように感じられる。

5. おわりに

絵画資料を中心に、行器、行器に類似した水桶を3Dソフトによる模式図で概観したが、脚の本数に関しては次のようにまとめることが出来る。

1) 3本脚とほぼ断定出来るタイプ

図9、20、21

2) 3本脚の可能性が高いタイプ

図15

3) 4本脚の可能性が高いタイプ

図17

4) 4本脚の可能性があるタイプ

図10、11、12、14、16、18

上記の分類で、1)と4)が多数を占めていることに特徴がある。確かに、3Dソフト上の模式図では可能性としてこのような分類になるが、13～14世紀の絵画描写法という視点で検討した場合、同様の解釈が成されるとは限っていない。おそらく、3本の脚を表現する手段として二つの構図パターンがあり、容器の中央に脚を配した場合は、他の2本も正面に描く慣習があったとする見解も出ると予測される。しかしながら、仮にこうした指摘が成されたとしても、3)に位置づけた図17の4本脚を完全に否定することは出来ない。脚の貫構造が明示されている以上、3本脚の論拠付けは困難となる。

総論としては、中世にも4本脚の円筒形水桶が存在した可能性は高い。但し、4本脚の行器が成立した可能性はあっても、4本脚が多数を占めたとする解釈は成り立



図22 脚付の籠（一遍上人絵伝）



図23 3本脚の洗面容器（岩手県大東町）

たない。図22は『一遍上人絵伝』に描かれた脚付の籠である。明確に表現された3本脚に、中世容器文化における形態観の原風景があるように思えてならない。

江戸中期に至っても、3本脚の行器が『和漢三才図会』に描かれている。伝世する図6タイプの行器が、管見の限りすべて4本脚タイプであるにもかかわらず、何故江戸中期の百科事典的な刊行物に3本脚と解説しているかが理解出来ない。古い形態をわざわざ事例として掲載した可能性もあり、この解釈については今後の課題としたい。

伝世する4本脚の行器は、早いものでも17世紀中葉あたりに制作されている。家紋を描いた4本脚の形式が徳川家光の遺品にある以上、徳川幕藩体制の確立と関係が深いと解釈するのが自然である〔注13〕。本来の機能であった野外での使用から、武士社会の形式を重視した調度品へと変化し、一つのステータスシンボルとして4本

脚の行器は全国の津々浦々まで拡散していく。江戸後期にはアイヌ社会まで浸透していったのである。

3本脚の木製容器は近年見かけることが少なくなった。しかしながら、少数ではあるが図23のような洗面容器を使用している地域もある。3本脚の木製容器が衰退した理由は、機能面にあったとは必ずしも断定出来ない。少なくとも、小型の円筒形容器に関しては、4本脚でなければならない必然性は見いだせないのである。

注

- 1) 『北野天神縁起承久本』では、貴族社会の住宅で使用人が食事に紙を使用している。但し、外出または旅先の食事では貴族も紙を使用している。
- 2) 岩井宏実：曲物の用途，大阪市立博物館研究紀要第10冊，4，1978
- 3) 中国社会科学院考古研究所編：廣州漢墓下，文物出版社，63，1981
- 4) 前掲2)，77
- 5) 林壽晋：戦国細木工榫接合工芸研究，中文大学出版社，図版4，1981
- 6) 宮内慤：美保神社の辛櫃の研究，デザイン学研究80，66，1990
- 7) 中国各地の博物館調査および博物館学芸員からの聞き取りでも、反った脚が櫃類に付けられた類例は一切認められなかった。
- 8) 河田貞：根来，紫紅社，138，1985
- 9) 川崎市立日本民家園の民具蒐集は、主に岐阜県内のものとされている。
- 10) 石村真一：結桶、結樽技術の発達について－1，郡山女子大学附属高等学校紀要第1号，6-8，1990
石村真一：桶の伝来時期と初期形態，デザイン学研究119，42-43，1997
河野通明：結桶前夜－縦板補強曲物の史的位置－，経済貿易研究研究所年報No.22，33，1996
- 11) 4本脚の模式図には、図6－イに示した貫構造を想定した。3本脚には貫構造は成立する可能性がないため、貫は想定していない。
- 12) 石村真一：我が国の運搬方法の発展系譜（I）－枋を使用した運搬方法を通して－，生活文化史N0.21，9，1992
- 13) 平成10年4月より行われている国立歴史民俗博物館主催の共同研究（民俗的画像に関する基礎的研究）で、徳川幕藩体制との関連性が示唆された。